

平成31年1月7日(月)

### 七草粥

七草がゆ・七草粥(ななくさがゆ)・七種粥とは、人日の節句(1月7日)の朝に食べられている日本の行事食(料理)である。

春の七草や餅などを具材とする塩味の粥で、その一年の無病息災を願って食べられる。正月の祝膳や祝酒で弱った胃を休める為とも言われる。

春の七草は、せり・なずな・ごぎょう・はこべら・ほとけのぎ・すずな・すずしろである。すずなは、かぶのこと。スズシロは大根。せりは香すがすがしい今のせり。ナズナはぺんぺん草。ごぎょうは、ははこぐさ。はこべらははこべ。ほとけのぎは、田平子ともいう。こうしてみると今も食されているものばかりであり、薬草としてもつかわれるものもあることから、自然と粥の具としては冬という季節のものとして十分な栄養を備えているといつてよい。

子どものころから、三日とろろと七種粥は必ず食べていたと記憶する。餅で太ったからだか、少しずつ日常を取り戻していくあゆみの中にあつた風習というものであろう。

1月4日にお正月のお供えの餅を下すときに、餅の傍らに小銭がおいてあり、我先に餅を下しながら小遣いを集めた記憶もある。1月8日にお正月を送る際には、お供えの松や榊をしめ縄にくるんで、歳徳神の方向に歩きに縛り付ける。

他の神の祭りとして、さいの目に切つた餅と米を、田んぼの中にしつらえた榊のもとにおいて、おからすおからすと何度か大きな声でお参りをするという行事もあつた。

まだ、私がいるうちには何となく続けていくこともあるだろうが、次世代にはつながらないかとも思つたりする。

そういえば、近くの大国魂神社がある地域では、酉小屋を復活させて、地域の子たちと大人たちが正月を送ることを続けていると聞く。とても大切なことであると思う。

酉小屋は、いわき地方に伝わる小正月行事。子供会などが主体となり、藁や竹などで小屋を建て、1月6、7日の深夜、あるいは早朝に正月飾りと共に燃やす。小屋は、田んぼや空き地に建てられ、ボンデンと呼ばれる笹竹が立てられる。小屋内には、神棚が設けられ、正月様や歳徳神が祭られる。

当日夕方より、酉小屋に集まり、中の囲炉裏でおでんなどを作り、正月飾りを持って来た人に振舞う。酉小屋を燃やすのは翌日早朝に行うところが多い。この時に、酉小屋を燃やした火で、焼いた餅を食べると一年間風邪を引かないといわれる。